

領域「表現」のねらいや内容が達成される
音楽表現活動を学修するための音楽系授業の一考察
—現場実習を経験した学生のアンケートをもとに—

豊辻 晴香¹⁾

A Study of Music Education to
Understand the Musical Expression Activities that
The Objectives of Childcare are Achieved:
based on the questionnaires by students

by

Haruka TOYOTSUJI

【キーワード】 表現（音楽）、領域、指導法、保育者養成課程

【要旨】

本稿では領域「表現」のねらいや内容が達成される音楽表現活動を学修するための音楽系授業を検討した。学生のアンケートをもとに考察した結果、授業で音楽の基礎的知識・技能を習得し音楽の楽しさや協同する喜びを経験できたこと、そして実習で音楽表現活動の実態や子どもの姿について触れたことで、指導法科目ではこれまでの学びと経験をもとに実践を想定しながら教育要領等に示された保育のねらいを理解できたことが分かった。しかし実践力が備わっていないことから、子どもの姿に触れる機会や学生の発信する表現を受け止める応答的な教育、そして授業と実習を連動させたカリキュラムの検討が必要であると推察された。

受理日 平成 29 年 11 月 30 日

¹⁾ 純真短期大学こども学科 講師

I. はじめに

平成 29 年 3 月に、幼稚園教育要領、保育所保育指針、そして幼保連携型認定こども園教育・保育要領が一斉に改訂・改正された。そのため、その改訂等の内容と整合性を図るべく、幼稚園教諭や保育士、保育教諭を養成する教育カリキュラムが見直され、いずれも平成 31 年度からの新課程適応に向け準備が進められている。

現行の領域「表現」に関する科目だが、幼稚園教諭課程では「教科に関する科目」と「教職に関する科目」に分類されていたが、新課程では「領域及び保育内容の指導法に関する科目」として設置されることとなった（平成 29 年 3 月・保育教諭養成課程研究会）。保育士課程においてはまだ決定していないが、教科名は現時点の「保育の表現技術」から「保育内容の指導法」に変更する案が発表されている（平成 29 年 10 月・保育士養成課程等検討会）。

両課程において最も重要視されていることは質（および量）の高い保育者を養成することである。そのためにも、保育内容の 5 領域に関しては、各領域の学問的な背景や基版となる考え方を学び、教育要領等に示されるねらい及び内容を理解した上で保育・指導にあたることができるよう、専門的知識・技能と着実な実践力を備えることが求められている。

寄（2016）は幼児教育要領における過去の音楽教育の変遷をたどり、現行（2010 年版）において音楽が領域「表現」に属すると位置付けられたことから、保育に求められている音楽「表現」は子どもの自発的な表現力を引き出すものであるべきだと示唆している。福西（2015）も保育現場での事例をもとに、保育者と子どもとの「関係」からはじまる表現活動の方法を内容とした授業を提言している。また保育を行うにあたり、独自性や創意工夫が十分に促され、子どもの生活と遊びが豊かに展開されるよう保育所指針等で示されていることから、麓（2015）は創造性豊かな保育者を育成するための音楽教育プログラムモデルを開発する上で、「実技」「楽典」「表現」を総合的・段階的に指導する方法を提案した。さらには出口（2014）は創意工夫のほかに、保育者を「音楽文化のにない手」として位置付け、子どものために多種多様な音や音楽のなかからできるだけ良質なものを保育環境構成として整える力を備えるよう提唱している。

このように、領域「(音楽) 表現」に係る授業目的および内容は、当然ながら幼稚園教育要領や保育所保育指針に対応したものでなければならず、そこに示された保育のねらいおよび内容を達成できるような表現活動を行う保育者を養成する教育内容と課程でなければならない。そこで、教育要領等が改正され保育者養成課程が見直されるこの時期に、本稿において保育者養成課程における学生が領域「表現」のねらいと内容を理解し、それらが達成される音楽表現活動を学修するための音楽系授業について検討することとする。手法として学生アンケートを取り入れる理由は、授業や実習における音楽的学びや経験、考え等について、学生の主観や自己評価などを取り入れるためであり、これは学生主体の授業を展望するよい機会であると考えられる。

II. 音楽系授業の概要

調査対象校における幼稚園教諭および保育士養成課程に係る音楽系授業は5つあり、その概要は次のとおりである。

① 教科 A (1 年前期/教科科目)

保育・教育現場での音楽実践が円滑に行われるために必要不可欠な「音楽理論」と「声楽」を学ぶ。「音楽理論」では音符、音階、調、コードといった基礎的な楽典を修得しピアノ演奏に役立てることを目指す。「声楽」では正しい声の出し方や正確な音程での歌い方を学び、様々な歌を歌えるようになることを目指す。

② 教科 B (1 年前期/教科科目)

少人数編成で、各学生のレベルに合わせた1対1でのピアノ指導を行う。保育・教育現場で取り上げられる園生活の歌、季節の歌、子どもの歌などを弾き歌いできるようになることを目指す。基礎となるスケール・カデンツを学び、子どもの歌の伴奏付け(コード奏法)の一助とする。

③ 教科 C (1 年後期/教科科目)

教科 B で習得した演奏技術をさらに向上させて、楽曲に沿った表情などをつけ、より音楽的に演奏できることを目指す。楽曲は子どもの歌等にとどまらず幅広いジャンルの楽曲に取り組む。また少人数でのグループ連弾を通して、音楽の楽しさやハーモニーの美しさを体感する。

④ 指導法 A (2 年前期/教職科目)

幼児音楽における子ども理解を深め、発達段階に即した適切な指導法について学ぶ。子どもの豊かな感性と想像力を育むために、音楽(特に歌)を通じた援助や指導を行い、保育者自身の感性も磨くことを目指す。

⑤ 指導法 B (2 年後期/教職科目)

幼稚園教育要領や保育所保育指針に提示されている領域「表現」のねらいを意識しながら、子どもの年齢や発達段階に応じた音楽表現活動(合奏、音遊び、音楽表現等)の保育内容と、その指導計画および展開について学ぶ。特に子どもの表現に気づく、受け止める、共有するための視点と具体的な音楽活用法を習得する。また、音楽の効果的な使い方を学ぶ一助として、物語のイメージに合う歌や音楽(=音楽物語)を選択できるようになる。

ただし、アンケート実施時点では学生は「合奏」と「音楽物語」の両活動への取り組みに至っていない。

III. 研究方法

1) 調査対象および調査時期

平成 29 年 9~11 月にアンケートを実施した。対象者は幼稚園教諭免許および保育士資格

の同時取得を目指す当短期大学こども学科（以下、本学）の 2 年生である。その中から条件として、1) 保育所実習、幼稚園実習、そして施設実習の全種類を経験している、且つ 2) 本学における音楽系科目の全 5 科目を履修している、の 2 項目を設定した結果、100 名分のアンケートを調査・考察対象とした。

2) 調査内容

アンケートは数回にわけて実施したが、1) 学校での音楽系授業に関する項目、2) 実習現場における音楽表現活動に関する項目、そして 3) 領域「表現」のねらいに関する項目を、選択式および自由記述で回答してもらった。なお、調査目的の一つである専門的知識・技術を学習した学生からの意見として、いずれの項目でも「ほぼ全ての実習を経験している」や「数ヶ月後に保育者になる」という視点を持ったうえで回答するよう依頼した。アンケートの項目は【表 1】のとおりである。

【表 1】アンケート項目	○選択回答（複数選択可）	●自由記述回答
○ 学校の音楽系授業の中で、あなたが学んだことは何ですか。		
○ 実習園では、どのような音楽（表現）活動を実施していましたか。		
○ 実習中に音楽（表現）活動の部分・設定保育をしましたか。		
● 五領域の「(音楽) 表現」で提示されているねらい・保育内容を実践するために、保育者にはどのような音楽的スキルが必要だと思いますか。		
● 数ヶ月後に（プロの）保育者になるにあたり、今あなたに足りない知識・スキルは何ですか。		
● 音楽表現活動を通して、あなたが子どもに一番伝えたいこと、経験してほしいことは何ですか。		

IV. 結果および考察

1) 音楽系授業における学び

① 音楽表現技術の教科科目（以下、教科科目）

1 年前期における教科 A の授業では、楽典、歌唱法、譜読みの 3 項目がそれぞれ 30～34% を獲得している（【表 2】参照）。学生は本格的な発声法や歌唱法、読譜、コード等の学びを重ねることで音楽専門的知識が深まった。そのため「音楽を楽しむ」とは純粋に音楽を楽しむだけでなく、分かること、できることが楽しい、という意見も含むと推察できる。また当授業では全受講生ではなく代表者がピアノ伴奏をすることがあった。このように初心者を含めた全員にピアノ演奏が求められない点も「音楽の楽しさ」が高い要因の一つと思われる。さらに、初めて音楽を本格的に学ぶ学生のためにも音楽教員によるコンサートを披露する機会も設けており、「感動して音楽の楽しさを知ることができた」学生もいた。

なお教科 A での「その他」にはピアノ演奏、曲の知識、弾き歌い法という意見が挙げられた。

反面、ピアノを主体として展開される科目（教科 B および C）では圧倒的に「ピアノ演奏法」の意見が多い。さらに「弾き歌い法」の回答が徐々に伸びていることを踏まえると、

【表2】「教科(表現技術)科目」を通して学んだ点・味わった点

		音楽的知識・技能		それ以外	
教科 A	1 年前期	楽典	34.4%	音楽の楽しさ	57.9%
		歌唱法	33.3%	練習の大切さ	26.3%
		譜読み	30.6%	パフォーマンス力	10.5%
		その他	1.6%	協同する楽しさ・大切さ	5.3%
教科 B	1 年前期	ピアノ演奏法	65.2%	練習の大切さ	83.3%
		譜読み	34.1%	パフォーマンス力	5.6%
		弾き歌い法	0.7%	伴奏の大切さ	5.6%
				達成感	5.6%
教科 C	1 年後期	ピアノ演奏法	60.5%	協同する楽しさ・大切さ	74.4%
		譜読み	24.4%	音楽の楽しさ	12.8%
		弾き歌い法	15.1%	音楽の美しさ	10.3%
				練習の大切さ	2.6%

1 年前期は個人でのピアノ演奏技能を高めることに必死だったが、1 年後期ではその技能を活かして春休みに控える実習のために「弾き歌い」法を学ぶ学生が増えてきたと推察できる。また、教科 C では個人演奏以外にもグループ連弾を実施していることから、約 75%の学生がグループメンバ

ー全員で一つの楽曲を作り上げる「協同する楽しさ」を体感している。その作業の中で学生たちは音を合わせるだけでなく互いに音を聞きあう姿勢も見られた。そのような経験が「音楽の楽しさ」だけでなく「音楽の美しさ」を味わうことにつながったのであろう。なお「練習の大切さ」が 1 年後期にかなり激減しているが、それは前期のうちにその概念が定着し練習する慣習が身に付いたこと、そして個人ではなくグループでの練習によって「協同する楽しさ」を感じることができたと考えられる。

② 音楽表現の保育内容指導法科目（以下、指導法科目）

上述した教科科目と違い、2 年生の保育内容指導法科目では全般的に音楽の表現法や活用法といった、保育現場を想定し子どもの表現を高める学びを得た学生が多いが（【表 3】参照）、それは学生の実習時期が関係していると思われる。本学では 1 年次の 2・3 月に幼稚園と保育所での実習を実施している。その中で子どもや保育者の姿に触れることで、学生は音楽がどのように保育現場で展開されているのか学び取ることができたのであろう。その証拠として、「それ例外」の分野ではこれまで受講者としての立場での学びが強い「音楽の楽しさ・美しさ」という内容から、「指導力」「計画力」という指導者としての立場の学びが多い。

また 2 年前期では「指導力」のほうが「計画力」よりも多く 2 年後期では逆転する結果となった。対象科目は同一授業ではないため単純に比較はできないが、一因として 2 年次の 6～9 月にかけて施設、保育所、幼稚園での実習を経験したことで 2 年後期ではある程度

【表3】「保育内容(音楽表現)指導法」科目を通して学んだ点・味わった点

		音楽的知識・技能		それ以外	
指導法 A	2 年 前期	表現法	31.4%	指導力	72.5%
		曲の知識	22.9%	計画力	17.2%
		歌唱法	20.0%	音楽との向き合い方	6.9%
		音楽あそび	11.4%	パフォーマンス力	3.4%
		ピアノ演奏法	7.1%		
		その他(伴奏、活用法)	7.1%		
指導法 B	2 年 後期	ピアノ活用法	51.6%	計画力	48.6%
		音楽遊び	19.4%	指導力	34.9%
		音楽の活用法	9.7%	子どもの姿	11.9%
		表現法	9.7%	楽しさの伝え方	2.8%
		楽器の知識	9.7%	楽しさ/パフォーマンス力	1.8%

の指導力を身に付けていること、そして経験を重ねたからこそ事前準備の重要性を実感することができたのではと考えられる。実際、学生は実習園での学びに「数分のために、選曲や歌詞の変更、子どもへの指導などたくさんの準備に労力を費やすことが分かった」と挙げている。

2 年後期の指導法 B において「子どもの姿」

に対する学びをした学生が出現した。この授業では教育要領や指針における表現領域での保育のねらいと内容を意識し活動内容を組み立てることに取り組んでいる。学生が指導計画を立てる際、子どもの姿を想像できず活動内容から考える場合が多い。なかには「保育者(=学生)自身ができること/できないこと」という視点で計画を立てる学生もいる。だからこそ、これまでの授業で培った音楽的知識・技術と実習での経験をもとに、保育のねらいと内容を理解できる活動内容をしっかりと計画する必要性を感じたに違いない。そしてねらい等を理解するためにも、授業をとおして学生自身が「感性をもつ」や「表現を楽しむ」を経験することは大変重要であり効果的であったと考える。なお、アンケート回答時期は指導法 B の受講途中であり、保育者養成に必要だと思われる音楽表現領域の全内容を学生が学ぶに至っていないことは今後の課題である。

2) 実習現場における音楽表現活動について

① 実習園での音楽表現活動

学生が実習を行った幼稚園・保育園で取り組まれていた音楽表現活動は、歌唱が 20.2% と最も高いことから (【表 4】参照)、現場では歌唱が生活の中で日常的に行われていたことが推察される。これに続く楽器演奏は (本稿ではある特定の楽器の演奏法を子どもが学ぶ活動を指す) 7 割以上の園で鍵盤ハーモニカや太鼓 (和太鼓も含む) に取り組んでいた

こともアンケート集計の結果により分かった。次のダンスやマーチング、合奏は運動会の演目として取り組んでいた園が多いが、現場における即戦力となるためには授業でも楽器の演奏法や編成といった内容に取り組む必要があるだろう。また、このような活動では「(子どもが) 自分の役割を理解し一生懸命取り組んでいた」「(子どもが) できるようになった時の喜びが大きかった」「(子どもが) 何度も何度も練習をしてみんなの音が一つになった時は感動しました」という回答があったが、これは子どもと同じように学生自身も授業で練習や協同の大切さを体験しているからこそ共感できる思いであり、子ども理解の視点につながる学びとなったと思われる。

音楽劇が披露される生活発表会のシーズンに実習していない学生にとって音楽劇に出会うことが少なかった。この結果から、実習現場において学生が触れる機会がある音楽表現活動の種類は学生の実習時期の影響を大きく受けることが判明した。そのため活動内容によっては学生が子どもの姿を予想することが難しいケースも生じる。教員はその可能性を予測し、例えば音楽表現活動に取り組む子どもを映した視聴覚教材や従来の実習期間外の園訪問と子どもの観察等の問題解決方法を考えることが求められる。

リトミックではほとんどの園でピアノの生演奏により活動が展開されていたことも判明した。そのための授業ではピアノ指導はもちろんのこと、身体表現と連携した学習法を行うことが必要であろう。

② 実習生として行った音楽表現活動

学生が実習中に行った主な音楽的な取り組みは、手遊びが 38.1%、ピアノが 33.5%、そして設定保育が 20.3%、それ以外は「していない」ということであった。

また「設定保育」の詳細は【表5】の通りである。ここでの生活活動とは朝の会、昼食の会、帰りの会といった生活活動の一部として歌を歌った(ピアノ伴奏をした)ということである。領域の音楽表現を主とした活動は以下につづく「歌唱指導」「リトミック」「音楽ゲーム」「手作り楽器」「ダンス」となるが、それらに挑戦した学生はごく一部であることから、実習生にとっての音楽表現活動に挑戦する敷居の高さが分かる結果となった。

【表4】園での音楽的活動

歌唱	20.2%
楽器演奏	19.2%
ダンス	17.8%
マーチング	15.2%
リトミック	12.5%
合奏	10.4%
音楽劇	3.0%
していない	1.7%

【表5】設定保育における音楽の使用

生活活動	87.0%
歌唱指導	2.2%
リトミック	2.2%
ゲーム	2.2%
手作り楽器	2.2%
ダンス	2.2%
企画出し物	2.2%

その要因として、第一に連続性・継続性という音楽的性質が挙げられる。子どもが一つの楽曲を作り上げるには相当の時間をかけることが多く、10日間から2週間という限られた実習期間の中で、実習生がその全過程にかかわることは容易ではない。

第二に、音楽は造形などの他表現に比べて視覚的要素が低い。そのため子どもや保育者が表出する音楽表現と其中で展開されることを、視覚のみならずさまざまな感覚を存分に活かしながら感じ取らねばならない。このようにはっきりと目に見えにくいものを手立てとする保育は、学びたての実習生にとって大変難しい。

第三に学生のピアノに対する自信のなさである。アンケート回答にもピアノが苦手だから音楽の設定保育をできればやりたくない、という意見が多数あった。このように音楽＝ピアノと考える学生が多いことから、表現領域としての「音楽」がなにか、その概念が学生にしっかりと備わっていない点が懸念される。音楽系教科はこのような課題を解決するために、学生に音楽表現とはどのようなものなのか、体感できるような創意工夫が求められる。

なお、設定保育を計画する上で領域「表現」のねらいを意識し実践したのか、という点は質問をしておらず、授業との関連性を見出すには至らなかった。

3) 領域「表現」のねらいと内容を理解するために

① 学生が考える、保育者に必要な音楽的スキル

「五領域の「(音楽)表現」で提示されているねらい・保育内容を実践するために、保育者にはどのような音楽的スキルが必要だと思いますか。」という問いに対して学生に自由記述で答えてもらったが、大きく分けて5つに分類することができた。(【表6】参照)。

【表6】五領域の「(音楽)表現」で提示されているねらいや保育内容を実践するために、必要な音楽的スキル

音楽についての知識	コードを覚える
	譜読みができる
	手作り楽器の知識
	音楽劇の知識
音楽技術と応用	(子どもに正しいメロディーを伝えるために)正しい音程で歌う
	子どもの前で弾き歌いができる
	子どもの動き等に合わせた演奏ができる(子どもを見ながら演奏する)
	一曲を様々なバリエーションで弾く
	子どもに合った音程や調での演奏ができる
表現力/保育力	歌詞の伝え方や歌いだしの合図の出し方
	(保育者自身の)音楽をとおした表現法や連想させる技法
	子どもが表現する楽しさを味わう(ことができる)ための工夫
	子どもに音を楽しませる工夫
	どのような(音楽)ゲームができるのか、想定しながら練習する
	日常生活の音と楽器を関連付けながら、(音楽)ゲームを考えておく
保育者の質	自分自身が音楽が好きである
	自分自身が想像や表現を豊かにするために、他人の演奏を聴く
子どもの姿	子どもが音楽に関してどういうことに興味・関心を持っているのかを把握しておく
	子どもの発達に合わせて曲を選ぶことができる

『音楽についての知識』では音楽の基礎的知識が主だが、そのほかにも「手作り楽器」や「音楽劇」のキーワードが出現したことで、子どもが興味を持つ音楽についての学びを学生が求めていることが分かった。

『音楽技術と応用』では具体的な音楽技術が挙げられているが、全体的に「子どもが○○できるよ」という子どもを主体とした視点であり、子どものための音楽の活かし方を考えた意見がでた。その視点は『表現力／保育力』でも表れているが、さらに「表現」や「連想」という点に着目した意見が多い。しかし実際に子どもが何を表現したいのか、どう表現するのかの把握には至らず『子どもの姿』を想像することができていない学生も多く、その学びの必要性を感じている意見もあった。

『保育者の資質』は自身を向上させるものとなっている。実習での感想で「(音楽活動を通して) 子どもも保育者も楽しそう」というコメントがあることから、保育者自身が子どもの良きモデルとして在りたいという、学生の思いが表れている意見だと考える。

② 学生が考える、保育者になるにあたって足りない知識・技能

「数ヶ月後に保育者になるにあたり、今あなたに足りない知識・技能は何ですか。」という問いに対して学生に自由記述で答えてもらったが、大きく分けて2つに分類することができた。(【表7】参照)。これらは前述の「必要な音楽的スキル」と概ね重複している。

【表7】学生が考える、今足りない音楽的スキル・知識

音楽的	ピアノ演奏技術 / 伴奏付け / レパートリーを増やす ピアノ活用術(表現力・ねらいに沿ったバリエーション法) 初見力 / 読譜力 / 楽器奏法 / 歌唱力や声量 子どもに合わせての演奏 / 人前で演奏する度胸
保育的	子どもを全体的にみる力 / 子どもの注目の集め方 ねらいをもとに活動を行う力 / 指導力や計画性 子どもの発達や(予想される子どもの)姿をふまえてのサポート

また、すでに教科科目で学んでいるはずのピアノ演奏等だが、保育現場を経験したからこそ更なる技術が必要だと感じていることが分かる。このように、実習の前後で学生の学習視点に変化が生じるため、たとえ同じ音楽系列の科目であっても期をまたいで受講することは学生にとって大変有意義であることが判明した。このことから、音楽に係る科目は入学から卒業まで2年間(大学では4年間)を通じて展開されるべきであり、授業内容を学生の学習(および経験)段階に合わせて設定することは、より保育のねらい等を意識した学びにつながると考える。

③ 学生が考える、音楽表現活動を通して子どもに伝えたい、経験してほしいこと

「音楽表現活動を通して、あなたが子どもに一番伝えたいこと、経験してほしいことは

何ですか。」という問いに対して学生に自由記述で答えてもらったが、大きく分けて4つに分類することができた。(【表8】参照)。

【表8】学生が考える、音楽表現活動を通して子どもに一番伝えたいこと、経験してほしいこと

分類	学生コメント	領域「表現」のねらい
音楽	さまざまな音があること	→ 感性
	音楽の楽しさを知り興味を持ってほしい	
	自分の好きな楽器や曲を見つけ、美しさを知ってもらいたい	
	音を楽しんでほしい	
	音楽の楽しみ方はさまざまであること	
表現	音楽の楽しさを体験し、自由に表現すること	→ 自分なりの表現
	自分が想像したことを音楽をとおして思いきり表現してほしい	
	自分なりに表現する楽しさ	
	音に合わせて体を動かす楽しさを体験してほしい	
	皆で同じ動き(表現)をする必要はないこと	
コミュニケーション	ばらばらの音や楽器が一つになる美しさや感動を伝えたい	→ 生活の中のイメージ/ 様々な表現
	友達と音楽を作り上げる喜び	
	コミュニケーションできること、音楽を通して友達の輪が広がること	
	言葉だけでなく、思いや気持ちを伝えたり分かちあう力が(音楽には)あること	
その他	少しでも音楽が好き、と感じてほしい	/
	音楽によって気持ちが安らぎ、明るくなること	
	「どう表現すればいいのか」を考えることの大切さ	

まずは音楽そのものについての思い(願い)である。この回答を見る限り、学生はおおむね「音楽は楽しい」と肯定的にとらえていることが分かった。また、音楽を通して「表現する」ことやその「表現する楽しさ」についても子どもに経験してほしいと考える学生も多かった。そしてその表現を自己内面の表出・発散だけにとどまらず、他者とかわるためのコミュニケーション・ツールとなり得ることができると考える学生もあった。これらの意見は、幼稚園教育要領や保育所保育指針で示されている領域「表現」のねらい(【表9】参照)に沿ったものが多く、コミュニケーションも生活の中で心動かす出来事やさまざまな表現法の一つととらえると、各分類は「ねらい」の1~3に相当するともいえる。このことから、学生は授業や実習を通して、領域「表現」のねらいと保育内容を理解し、それを実践したいと考えていることが分かった。

「その他」として、音楽表現を通じた情緒のコントロールや表現を考えることの大切さといったより深い経験や姿勢を求める意見もあった。それにより、学生は授業や実習を通して「音楽表現」の可能性を見出していると推察される。

【表9】 領域「表現」のねらい ~幼稚園教育要領・保育所保育指針より~

「表現」	感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする。
1	ねらい
	(1) いろいろなものの美しさなどに対する豊かな感性をもつ。
	(2) 感じたことや考えたことを自分なりに表現して楽しむ。
	(3) 生活の中でイメージを豊かにし、様々な表現を楽しむ。

また「自分の好きな楽器～」 「音楽の楽しみ方はさまざま」 「同じ動き（表現）をする必要はない」といった、子どもが「自分なりに」表現することを考えることができる学生も散見された。このような子ども自身の「表現しよう」とする姿に気づき、その意欲を受け止めることができるようになるためには、まずは学生自身の表現などを教員に受け止められる体験をすることが重要であろう。そのためには、保育者養成課程の音楽系授業は教員の一方的な指導ではなく、学生が自由に表現しその発信を教員が受け止めるという応答的な教育が必要だと考える。

V. まとめ

教育要領や保育指針等の改正に伴う幼稚園教諭および保育士課程のカリキュラム見直しにあたり、領域「表現」のねらいや内容が達成される音楽表現活動を学修するための音楽系授業を考察した結果、以下のような点が分かった。

1年次は子どもとかかわる経験が乏しいことから、基礎技能を中心とした内容が展開されている。その中で学生は音楽的知識・技術を習得し、さらに（教員演奏による）本格的な演奏や音楽に触れたり少人数グループでの連弾で協同性を身に付けたりすることで、音楽の美しさや楽しさを味わうことができた。

2年次はさまざまな実習を経験していることから、これまでに培った音楽的知識・技術を活用した音楽表現の指導法についての学びが展開されている。その中で学生は具体的な音楽表現法やピアノの活用法のほかに、保育者としての計画性・指導力を身に付け、子どもを主体とした音楽表現活動の在り方を考えることができた。

このように多くの学びを得たにもかかわらず、学生が実習でその学びを活かした経験が少ないことは大変遺憾である。また園での音楽表現活動との出会いも少ないため、頭の中で計画はできて子どもに実践するに至っていないのが現状である。福西（前述）も述べたように保育表現は保育者の一方向ではなく子どもとの関係によって生み出されるものである。これらの問題を解決するためには、学生がより多くの音楽表現活動に取り組む子どもの姿に触れることができるよう、機会を設けることが望まれる。

短期大学での2年間の音楽系授業と現場実習を通して、学生は保育に必要な音楽的知識・技能を見出すことができている。また学生が子どもに望む音楽表現活動のねらいが幼稚園教育要領や保育所保育指針の領域「表現」とある程度合致していることから、学生は教育要領等の保育のねらいと内容を把握していることが分かった。ただしそれらを理解し重要さを認識していても、それを実践する力は不足していた。

学生の学びのすべては連続的に発展する。本研究では授業と実習を結び付けた質問をしていなかったため、その関連性や因果性等を具体的に示した学生意見を得るに至らなかった点は課題として残るが、学生にとって授業での学びと現場実習での経験は一方通行ではなく常に絡み合いながら展開されていることはアンケート結果より推察できる。そのため、授業学習と現場経験の連携が不可欠であり、例えば実習の前後に指導法の授業を行うなど、学生にとって最適なタイミングで最良の内容を学ぶことができるよう弾力的な教育カリキュラムを構築する必要がある。そして実習での振り返りで「日々の生活の中で（子どもが）

音楽に触れることが大切だと思った」、「音楽があることで、子どもたちも（は）生き生きと楽しんでいた」と述べたように、授業においても学生がそのことを十分に体感できるよう、教育課程再編においては養成校の独自性をそなえた創意工夫に努めたい。

【引用・参考文献】

- 厚生労働省編（2008） 保育所保育指針解説書，フレーベル館。
- 出口 雅生（2014） 保育者養成課程における音楽科の教授に関する一考察，浦和論叢（50），43-61。
- 福西 朋子（2015） 領域「表現」と保育者養成課程における音楽表現の指導・援助方法科目について，高田短期大学紀要（33），33-40。
- 麓 洋介（2015） 保育者養成校における音楽教育についての一考察 — 「実技」「楽典」「表現」の関連付けによる総合的・段階的な指導のための授業モデル—，愛知教育大学研究報告．教育科学編（64），21-26。
- 保育教諭養成課程研究会（2017） 平成 28 年度 幼稚園教諭の養成課程のモデルカリキュラムの開発に向けた調査研究—幼稚園教諭の資質能力の視点から養成課程の質保証を考える—，平成 29 年 3 月。
- 保育士養成課程検討委員会（2017） 保育士養成課程等の見直しに向けた検討状況について，第 8 回保育士養成課程等検討会 資料 1-1，平成 29 年 10 月。
- 文部科学省（2008） 幼稚園教育要領解説書，フレーベル館。
- 寄 ゆかり（2016） 保育者養成校での「保育内容・表現」における音楽の位置づけ，大阪千代田短期大学紀要（45），35-48。